RASHINBAN

# 羅針盤

主幹 荒木 光弥

# 援助国序列第4位のフランス
## 見えてくる内輪の事情

### 借款援助大国フランス

2023年１月の経済協力開発機構（OECD）データベースの外務省資料の開発援助委員会（DAC）諸国の開発援助手法別実績によると、世界の援助国序列は次の通りである。

１位米国（483億ドル）、２位ドイツ（362億ドル）、３位日本（220億ドル）、４位フランス（194億ドル）、５位英国（165億ドル）、６位イタリア（66億ドル）、７位カナダ（64億ドル）、８位スウェーデン（60億ドル）、９位オランダ（53億ドル）、10位ノルウェー（47億ドル）。

次に、援助の性質を比べてみると、無償の協力の割合は、米国が80％、次いでノルウェー73％、オランダ62％、カナダ・スウェーデン58％、英国50％、イタリア34％、フランス22％、日本は18％で最下位だ。一方で、借款ベース援助の割合を比べてみると、日本は55％で世界のトップを占め、次がフランスの35％だ。次いでドイツ14％、カナダ10％、イタリア5％、英国とスウェーデン２％という序列になっている。皮肉な言い方かもしれないが、借款ベースの支援で日本とフランスは突出しており、“借款援助大国”としての知名度を高めている。

ただ、日本とフランスとでは援助の中身が違うという意見もあるので、今回は日本でよく知られていないフランスの援助実態に焦点を当てることにした。

ちなみに、日本の独善的かもしれない言い分では、借款援助は「借りたものは必ず返す」という自助努力の精神を育てる効用があり、結果として援助効果を高めることになると強調する。日本では明治維新からの伝統なのか、“自助努力の精神”が開発援助の背骨になっている。

一方、フランスは伝統的に“文化”を尊重している国として、フランス語の普及とフランス文化への理解を深める対外協力に力を入れている。

### 多くの属領も援助対象か

それでは、フランスの対外援助とはどういうものなのか。初めに驚かされたことは、援助対象の多くがフランス海外県や仏領に集中していることである。これらをフランスでは援助対象国に組み入れている。世界はこれを援助として認めているのかどうか定かではない。ところが、日本のタイド（ひも付き）援助が問題にされた時に、OECDのDACでフランスの援助が問題になったという話は聞いたことがない。不可解な話である。

例えば、インド洋のマダガスカル島近くの仏領フランス海外県レウニオン、カリブ海に面したラテンアメリカのマルチュータ（仏領）、南太平洋のポリネシア（仏領）、ニューカレドニア（仏領）、グアドループ（仏領）、ギアナ（仏領）などもフランスの対外援助に組み込まれている可能性が強いという。フランスの援助で広く知られる援助対象国は、モロッコ、

特集

# 発展続けるミンダナオ
## 平和が導く未来への道

2023年2月、フィリピンからフェルディナンド・マルコス大統領が日本を訪問し、岸田文雄首相と会談した。同大統領からは、ミンダナオ和平における日本の長年の支援に対する謝意が示された。2025年にはミンダナオにおける「バンサモロ自治政府」樹立に向けた選挙も行われる。さまざまな苦難に直面しながらも、成長を続けてきたバンサモロ、そして関係者たち。そんな歩みを支えてきた日本の活動も振り返りつつ、今後の平和構築の在り方について考察する。

Zoom Up!

## イスラム文化と自然資源の宝庫


### 1.平和の定着と地域の発展

**バンサモロの中心地、コタバトに光**

<コラム>地域の成長を後押しする若者たち

### 2.兵士たちの新たなステージ

**武装解除のその先へ**

<コラム>個人のニーズに寄り添った訓練を目指す

### 3.バンサモロの未来を担う子どもたち

**教育が恒久的な平和のカギ**

<コラム>教育現場で“宗教”といかに向き合うか

### 4.正式な自治政府の発足を目指して

**選挙控えたバンサモロ議会**

バンサモロ暫定自治政府議会 副議長　オマール・セマ氏

[News] バンサモロで選挙条令が可決

### 5.日本への信頼が紡いだ平和構築

**ミンダナオ和平から学ぶ教訓**

国際協力機構（JICA）ガバナンス・平和構築部 平和構築室 室長
室谷 龍太郎氏


写真は、バンサモロ・ムスリム・ミンダナオ自治地域（BARMM）ウピ町のオブレグ小学校の校庭。フィリピン国旗の右側にたなびいている旗が、BARMMの旗。同校については本誌22ページで紹介している＝本誌編集部撮影

# バンサモロの中心地、コタバトに光

## 平和を土台に成長を続ける街

コタバトのランドマーク、グランドモスク。ブルネイ王国からの部分的資金援助を受け、2011年に建設された＝写真は全て本誌編集部撮影

### “幸運”を祈られる地

「日本が関与した平和構築の中で、最も成功している」とも言われているミンダナオ和平支援を取材するために、筆者はミンダナオ島のコタバト市に向かった。

コタバト行きの航空機が出るマニラ空港第２ターミナルは、フィリピン各地へ向かう乗客で賑わい、リゾート地へ行く外国人観光客も多く見られた。そんな中、フィリピン航空のカウンターでチェックインした際に印象的な出来事があった。受付の青年から「コタバトからどこに行くの？ダバオ？セブ？」と聞かれたのだ。仕事のためコタバト市内に滞在することを伝えると、青年は少し驚いたような表情を浮かべて「深くは聞かないけど、グッドラック」と言いながらチケットを差し出した。事前にミンダナオが40年にもわたる紛争地であったことや、長い間テロなどで苦しんだ土地であることを勉強していた筆者は、「やはりコタバトは“グッドラック”と祈られる地域なのだ」と感じた。

今回訪問したミンダナオの紛争影響地域は、日本の外務省が渡航中止勧告を出している危険度３の地域だ。国際協力機構（JICA）からも、何らかの事件や事故に巻き込まれる可能性に備えて、警備員とドライバーと常に行動するよう勧められていた。こうして、「何かとんでもないところに来てしまったようだ」という気持ちを抱えながら、常夏の地、ミンダナ